



愛知淑徳大学

URL=<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

Newsletter

第28号

発行年月日：2009年10月15日
 〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9
 Phone 0561-62-4111 EX 2498
 FAX 0561-63-9308
 E-mail : igws@asu.aasa.ac.jp

IGWS 第28号ニュースレターの目次

○ 第21回定例セミナー報告	1
○ 学生感想文	3
○ アメリカ視察報告 — アメリカ社会の市民力	4
○ 第8回日本フェミニスト・カウンセリング学会ワークショップに参加して	5
○ 母から生まれ、自立する	6
○ リンダ・オーハマさん講演会報告／お知らせ	7
○ 2009年度後期ジェンダー関連授業紹介	8

2009年6月8日（長久手キャンパス）、15日（星が丘キャンパス）の2日間にわたって、ジェンダー・女性学研究所主催第21回定例セミナー「ジェンダー化された自然 — 18世紀の博物学を題材に」を開催いたしました。以下はその概要です。

長久手・星が丘両キャンパス開催

ジェンダー化された自然

— 18世紀の博物学を題材に —

講師 小川 眞里子さん
 (三重大学人文学部文化学科教授)



近年、ジェンダーに対する意識は高まってきたとはいえ、人間をとり囲んでいる自然までもが、人間のつくりあげたジェンダー規範から自由でないということを知れば、誰もが驚くのではないだろうか。

今回のセミナーは、三重大学人文学部文化学科教授の小川眞里子先生をお招きして、18世紀の博物学を題材にしながら、自然におけるジェンダーについてお話を伺った。

小川先生は、科学史・科学論が専門で、『フェミニズムと科学／技術』（岩波書店、2001年）、『甦るダーウィン』（岩波書店、2003年）のご著書や、『植物と帝国』（ロンダ・シービンガー著、工作舎、2007年）など翻訳書も多数。時には聴講者に問いかけ、時にはカモノハシのぬいぐるみを取り出しての講演は、熱意とユーモアにあふれ、聴く者を話に引き込んだ。

「18世紀は分類の世紀です」話は、まずここからは

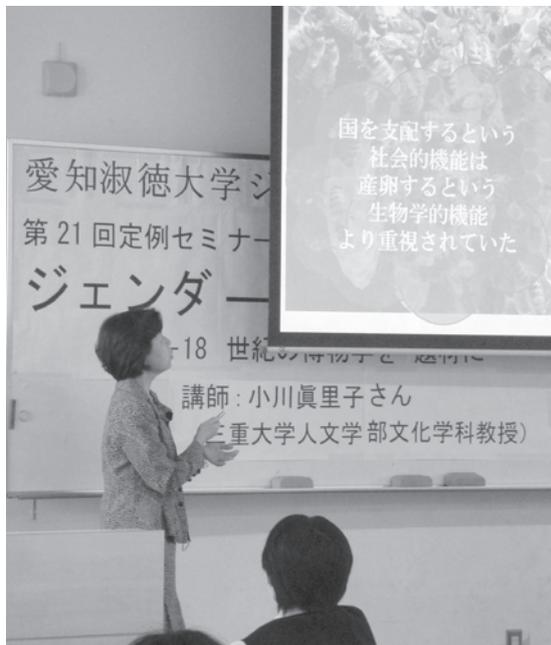
じまった。リンネは、1735年に出版された『自然の体系』で、植物・動物・人間、あらゆるものを分類した。しかしそこで何よりも重要なのは、「分類」というものが恣意的なものであり、「自然は真理が書かれた書物から、解釈をまつテキストへと」変化したことだ。つまり、わたしたちの思いとは、全く別に存在しているものと考えられがちな自然にも、人間的な価値判断が入り込み、自然もジェンダー化されているということなのだ。

「植物のセクシュアリティは、17、18世紀に突如浮上」し、「植物にも性がある」ということが考えられるようになった。ちなみにリンネが『植物の婚礼序説』を著したのは、1729年のことである。

しかし、リンネは植物を分類する際に、雌しべではなく、雄しべの数を基準に決定した。それは、「男性優位な社会に暮らすリンネにとって、雄しべの優先は当然」のものだったからである。

また同じような理由から、「女王蜂」は、卵を産むことが知られているにもかかわらず、アリストテレスの時代以来ずっと、「王蜂」と呼ばれてきたという。すなわち、支配者＝雄という、極めて人間的な価値判断が、昆虫の命名に反映されたのだ。

さらに、「動物の場合とはもかく、人間において女性性は、男性の出来損ない、熱の不足で性器が外に出ないまま留まった未完成品と考えられ」ていたというのでも驚きである。



名古屋ゆかりの伊藤圭介についてのお話もあった。現在では、雄しべ、雌しべという名称は一般的であるが、それらはそもそもラテン語の名称では、「Stamen(織物の縦糸の意)」「Pistil(すり粉木状の乳棒)」といった、生殖とは無関係なものだった。それをN・グラー著の『植物の解剖』を訳す際に、「あらゆる植物は雄か雌」と擬人化して認識し、はじめて「雄しべ」「雌しべ」といったことばを使ったのが、近代植物学の祖といわれる伊藤圭介だったという。

また18世紀後半は、乳母制度全盛期の時代だった。折しもリンネは、乳母制度の弊害を説く論文を執筆し、それまで「四足動物」に分類されていた人間について、「乳房動物」という新たな分類名を提案した。乳母制度の浸透によって、母親たちは授乳をしなくなったばかりか、子供を作ろうとせず、乳幼児死亡率も高まっていた。そうした中「リンネの用語は、動物も人間も女性が母乳で子育てすることが、どれほど自然なことか強調することによって、ヨーロッパ社会の再構築を正当化」したのである。「重商主義を背景に、労働力増大への期待」が高まる中、「女は子産み子育てに専念せよ!」という「女性に対する強力なメッセージを内包した分類名」がここにできあがったわけである。

では、果たして18世紀の博物学は、価値中立であったのか? 講演を聴いた者なら、否と即答できるだろう。当時の知識人たちは、科学を援用することによって、人間的な価値判断を、自然が命ずるところだと思わせたのであり、自然もまたジェンダー化されていたのである。驚きと納得の連続で、話に釘付けになった90分であった。

(文責 IGWS 運営委員 森井マズミ)



学生感想文

古澤 慧子

小川眞里子先生の講演を聞くまで、博物学の世界にジェンダーが存在し、男性優位の世界があるということは考えたこともなく、とても驚きました。動物でもメスは“女性らしい”描かれ方をしていたという事実を知り、もの見え方まで変えてしまうジェンダー概念の影響の大きさを感じると同時に、自然は人間の手では変えられない存在であるという考えは成り立たないことに気づきました。Mammalia(乳房動物)という分類名は、18世紀の社会が“選び取った”名前だったように、自然をどう見るかは、社会背景やその時代の知識人の思惑を当然含みうることに気づかされました。

今の社会でも、男性らしさ・女性らしさという意識は存在し、その意識のために窮屈な思いをする場面は、女性に限らず男性にもあると聞きます。お互いにマイナスの面を認識しているのにも関わらず、なぜこのような意識をなくすことが困難なのか、ずっと疑問でした。18世紀の男性優位の社会で「支配」を重要視し

ていた当時の知識人が偏った解釈をしたため、それが今も変更するのが困難な考え方をつくり上げているのです。しかし、変更不能だと思っているものでも、人間が後から解釈の操作を重ねてきたために起こっているのだと考えれば、この意識を変えることができるのも解釈なのだと思います。

今回の講演を通して、支配することを重視した時代の権力者がそれぞれの思惑によって周りの事象に対する見方を歪めてきたことを知り、解釈が社会に与える影響の大きさを感じました。

偏りのない解釈をするには、支配という考え方をなくすことが必要ではないかと考えます。支配することが優位とされる意識を変え、共生・多様性の許容を重視する解釈に変えていくことは、女性の価値を認めるだけでなく、すべての人が生きやすい社会につながるのだと思いました。

(本学文化創造学部4年)

長屋 梓

小川眞里子先生の講演は、18世紀の博物学をテーマにし、時代の偏見や概念がいか自然解釈に影響を与え、人為的に分類されていたかをお話されました。「植物の性の発見による、分類の変化」「動物の中でも、哺乳類を分類した時、何故乳房動物(Mammalia)という分類名を選んだか」「乳房動物を人類に結びつけ、人間社会へ自然へ」という三つの内容から成る講演では、とくに18世紀の博物学を例に挙げられ、当時の博物学が価値中立なものではなく、社会的状況・知識・偏見によって影響を与えられていることを知りました。18世紀のヨーロッパ社会では、乳母制度を廃止するにあたり、科学説を持ち出して「動物は子供を育てている、よって人間も子供を育てるべきだ」と女性に訴えたそうです。当時の人々は自然に対して反抗するという形で社会的要請を否定したのですが、実際には自然の分類自体が社会での必要に応じて、すでに人為的に選び取られていたということです。

小川先生の講演から、特定の社会の必要性・価値観

から、自然という物理的な存在物に対しても、知らず知らずのうちに人間の考え方を反映してしまうということを知り、そうした意識へのすりこみをとても恐ろしく感じました。社会を形成し集団社会として生きている人間にとって、偏見は付き物であるため、今後も人間は本質を無視して、知らず知らず社会通念に囚われた見方をしていくのでしょうか。現在の世界でも、文化や価値観の違いにより、同じ人間であるのに多くの衝突を繰り返しています。人間が社会的動物である限り、人種、性差、国籍など取り扱うべき問題は多く、現実には、自分と社会のルールや暗黙に了解された偏見に苦しむ人々が存在しています。しかし歴史の流れの中で、人の概念は変化しています。分類という学問分野を逆戻り、いずれにおいても原点で共通するものが存在するという点に注目し、違いを許しあうことで多くの個々の人々が自分に誇りを持てるような社会にしていきたいと感じました。

(本学コミュニケーション心理学科2年)

アメリカ視察報告

報告者 神崎裕子さん

(本学コミュニティ・コラボレーションセンター事務室室長)



神崎さん(左から2人目)

アメリカ社会の市民力

ーアメリカ社会の非営利組織は「市民力の素」ー

本学のCCC(地域と連携して大学生の諸活動を支援するセンター)の職員の神崎さんが今年1月末に3週間ほどアメリカ各地の市民組織、政府機関、大学などを視察した。その視察先は学生の地域活動、地元産業振興、雇用創出、貧困層の支援、成人教育、民族・性差別撤廃等の活動をする組織、機関等だ。学生に職場や諸活動の実体験を持つ機会を作る活動の参考にするためだ。アメリカ社会で注目すべき非営利組織、関連政府機関、同種の活動を持つ大学などは多い。丁度オバマ大統領就任直後で、社会全体の高いテンションの中、貴重な体験をされたようだ。私は神崎さんの報告会后、収集された資料も拝見した。大変興味深い資料も多くあった。

歴史的にみて新たな社会の動きは当初はメジャーなメディアには登場せず、パンフレット、個人的なHPやミニコミに登場する。遡って18世紀の仏革命の頃、パリの国立資料館の職員は、運動を展開する市民の後を付いて回り、その人がバラ撒くチラシをすべて集めて回るという作業をしたという逸話がある。その中こそ新思想があると知っているからだ。今回の資料にもそれに類するものがある。以下、私の興味を引いたいくつかの報告・資料の内容について紹介してみたい。

その一つが大学の経営学部が地域と連携し、無料でインターネットなどを活用して地域の零細起業家を誘い、個別相談にのり、研修し、起業機会を作り、さらにレベルアップの場合には大学院社会人として受け入れるというものだ。経営、コミュニケーション、市場開発などについて実践的学習機会を作るという教育活動で Indiana University の活動、さらに連邦政府の Small Business Administration(SBA) の地方支部などの活動がある。それらの資料から、市民にとって、零細企業を支える地方政府機関、非政府機関、大学が

いずれも個人の起業を支援していることがわかる。アマから出発してビジネスのプロに育てるという踏み込んだ個別相談をしている。

第二が就労中断した女性を社会貢献、就労の場に再度入れるよう動機付けをする活動である。すでに横浜市ではフランスからの再就職研修プログラムを取り入れて実績を上げている。PCなどの基本的スキル、市場分析、ビジネス・エチケットなどを習得でき、この機会を無料提供する非営利団体である。Project Wise という非営利組織の紹介冊子はこれらが社会再参加には必須であると述べている。低年齢の少女たちにも自分の可能性を積極的に教える組織もあり、Girls Inc. として課外活動で積極性を少女たちに身に付けさせている。私も卒業生が子育て後、再就労・転職を模索している姿を多くみてきた。保育サービス付き社会人スキル講座、資格取得学習などを無料で実施すればニーズはあるだろう。

第三の例として女性のキャリア形成、管理職育成に長い歴史を持つ非営利組織 Catalyst (カタリスト) である。経理年次報告書をみると予算10億円規模の収支である。これだけの非営利団体が企業からの寄付もあり、資金力を拡大し、女性キャリア育成を持続できることはアメリカ社会の底力を感じる。その背景にアメリカ社会が寄付行為を奨励し、認定された非営利組織への寄付は誰でも免税措置を受けられる事情がある。

さらに女性と政治研究所の調査報告書で興味深いのは、母性保護に対してアメリカ社会がEUなどと比較していかに遅れているかを示す結果報告である。日本では正規雇用になった女性たちは出産休業、育児休業をとれるが、それは全女性就労者の中の少数派であり、多数派の65%くらいは非正規雇用でそれらの権利もない状況だ。この格差は今後も拡大してゆく気配だ。今後、本学の学生たちがCCCを通じて在学中にさらに社会との連携を深めることを期待したい。

(文責 IGWS 運営委員 國信潤子)



第8回 日本フェミニスト・カウンセリング学会名古屋大会(5/23, 24開催) ワークショップに参加して

森 靖博

フェミニスト・カウンセリング学会の大会会場であるYWCAに到着した時、「フェミニスト・カウンセリング」は一体何なのだろう、どのように活動しているのだろうという疑問と、分からないことを質問されたらどうしようという不安が頭をよぎりました。しかし実際に参加してみると、分科会とワークショップの内容は学生である自分にも分かりやすい上、質問もいつくかできたので、とても勉強になりました。

分科会では、「性暴力被害者の回復に有効な法制度とは」という題の下で「性暴力禁止法をつくらうネットワーク」のメンバーの話を聞き、性犯罪被害に対して、わが国の法整備がまだまだ不十分なものであることを知りました。また、カウンセラーの方が自ら経験した事例を交え、被害を打ち明けることの大変さや加害者に対する恐怖心など被害者が抱える様々な問題についての報告を聞いて、我々大学生にもこうしたことを学ぶ機会が欲しいと思いました。

ワークショップでは、「NPO法人・エンパワメントかながわ」のメンバーから、高校生におけるデートDVについて行った調査結果と恋人同士で理想の関係をつくるにはどうしたら良いのかを高校生に考えてもらう啓発活動の詳細を聞きしました。デートDVとは恋人間で起こる様々な暴力のことです。二人の間で「暴力」を「愛」としないために、まず自分自身を大切にできる心が何よりも大切であり、そこから恋人を本当の意味で大切にできるということには、心から納得しました。

この大会に参加して、我々が考えなくてはならないことが現実社会には山ほどあるということを痛感しました。ジェンダーという問題は誰もが一生付き合っていくものです。この大会で得られた知識を記憶として留めておくだけでなく、自らの生活や行動に積極的に役立てていきたいと思えます。

(本学コミュニケーション心理学科2年)

少数 真子

5月24日、私は名古屋YWCAで開かれた日本フェミニスト・カウンセリング学会名古屋大会に参加して来ました。午前中は『女性の為の自己尊重トレーニング』のワークショップ、午後は『男性性被害者とフェミニスト・カウンセリング』の分科会に参加しました。他にも様々な興味深い分科会やワークショップが開かれており、全てに参加したかったくらいでした。

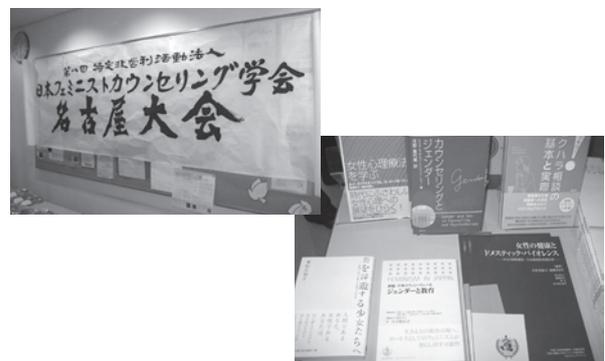
午前中に参加したワークショップは、元々YWCAで1995年から開かれている同様の講座の体験版といったもので、女性に関わる問題を女性自身が認識し、それに対してどのように対処すべきかなどについてグループワークでディスカッションという形で行われました。今まで私は、男女共同参画に付随する「女性だから何でもできる!」という考え方にはあまりピンとくるものがありませんでした。しかしワークショップに参加してみて、この考え方の必要性がわかったような気がしました。特に根拠があるわけでもないこうしたキャッチフレーズを使わなければ、女性たちは外に出られなかったのでしょうか。もちろん、発信者にその意図があったのかはわかりませんが。

午後に参加した分科会は専門的・実践的な内容が多く、難しい部分も多かったのですが、非常に勉強になりました。

ここでは「女性への抑圧」とは対照的な「男性への抑圧」の実態の一端を知ったように思います。また、支配欲というものは男性固有のものではないということ、必ずしも女性は被害者のポジションにいるばかりではないことも再認識できた気がします。

おそらく私は、この学会に参加することによって得られるはずの一部分しかわかっていなかったであろうことを口惜しく思います。同時に、このような学会に参加する機会を与えてくださったジェンダー・女性学研究所に感謝致します。

(本学図書館情報学科2年)





母から生まれ、自立する

古井 景

主なる神は、土の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。（略）主なる神は言われた。「人が独りであるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」（略）主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。「ついに、これこそ

私の骨の骨 私の肉の肉。これこそ、女と呼ぼうまさに、男から取られた者だから。」…これは、旧約聖書 創世記第2章に記されている『人の誕生』の物語である。ここでは、まず男が造られ、そのあばら骨から女が造られたとある。神は、決して男尊女卑を意図しておられるのではないと思うのだが、過去に、ユダヤ教・キリスト教において、女性が神殿（幕屋）に入ることが制限されるなどの不利益を受けていたことは事実である。医学的に考えるならば、男性の性染色体はXYで現され、女性のそれはXXとされている。人は女性型が原則で、Y染色体を持っているときのみ男性型を取ることがわかっている。まず女性型があって、その変形として男性型が造られる。男性から女性がではなく、女性が原型である。妊娠は、父（男性）と母（女性）との共同作業によって成立させることができるのだが、子宮の中で胎児を守り育て、出生させるのは女性である。子どもは、母親（女性）から生まれ、乳児期には絶対的に母親に依存している。やがて、母親から精神的に自立を果たし、『自分（自己）』を確立していく。母親は子どもにとって、空気のようなものである。なくてはならないものではあるが、空気に触れても、その感触から『自分（自己）』を感じることはできない。それに対して、父親は、子どもにとって初めて出会う『他人（自分以外のもの）』である。『他人（自分以外のもの）』と関わることによって、『自分（自己）』を感じることができる。母から生まれ、父によって育てられる（母親からの精神的自立が促される）のである。（母親からの自立を促すのは、母親以外の『他人（自分以外のもの）』であり、必ずしも、父親でなければならないわけではない。）S. Freudは、男児が母親に親愛なる感情を抱き、父親への攻撃的葛藤をい

だく成長過程を、ギリシャ神話のエディプス王の話を引用して、エディプス葛藤と位置づけている。旧約聖書の神は「父なる神」と称され、「創造の神」であり「怒りの神」である。新約聖書の神は、「子なる神」「救いの神（イエス・キリスト）」である。イエスは、十字架にかけられ、死に葬られ、甦る。これは、エディプス葛藤を乗り越えて成長する子どもと父親の関係に似ている。これに対して、（これはあくまでも私見であるが）旧約の神は、「父なる神」ではなく、「母」のイメージを持つのだが。母親との絶対的依存の状態、乳児は魔術的な幻想の中に存在し、やがて、母親から自立することによって、現実的感覚を身につけていく。まさに、母親は「産み（生み）の神」である。何故、母が、女性が、前面に出てはいけぬのであろうか。男性には、物理的に女性との距離を置き、女性を遠ざけなければならない理由があるのであろうか。男尊女卑は、男性が女性に対して抱く恐怖の裏返しと考えられる。男性が女性に対して抱いている『恐怖』の念とは、如何なるものであろうか…。母親からの自立を達成していない男性ほど、女性を『恐れる』のではないだろうか…。男性から向けられる恐怖心（攻撃性）に刺激され、男性を敵視する女性も、同様に『母への恐怖』を持っているのであろう…。

（本学コミュニケーション学部教授）



レオナルド・ダ・ヴィンチ
聖母子と聖アンナ

グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科主催 / ジェンダー・女性学研究所共催

リンダ・オーハマさん講演会

The Connection and Change through Generation of Women in the Past Century



「Obachan's Garden」をもとに
講演する
カナダ出身の映画監督
リンダ・オーハマさん

リンダ・オーハマさんはカナダ出身の映画監督で、彼女の代表作である *Obachan's Garden* をもとに講演は進められた。彼女はもちろん英語話者だが、日本語を学習中とのこと。片言の日本語を交えた講演には、大変親しみやすさを感じた。オーハマという名字からも外見からも、彼女の母語が英語であることは語りはじめられるまで分からなかった。彼女は日系三世のカナダである。この映画は彼女のルーツを物語るものであり、近年、彼女が日本を何度も訪問するきっかけともなった。映画のタイトルの「おばあちゃん」はオーハマさんの祖母を指している。祖母ムラカミアサヨさんは、「Happy」というニックネームで友人たちから呼ばれるような快活な女性で、「庭」にはきれいな花をたくさん咲かせ、友人たちの間でも評判だったようだ。しかし、祖母の人生はそのような美しい庭のイメージとはかけ離れたものだった。この映画ではムラカミアサヨさんの人生の軌跡を辿っている。

ある時期までオーハマさんは、祖母がどんな人か分からなかったという。なぜ祖母は日本語しか話さず、自分は英語しか話さないのか。オーハマさんは祖母の奏でるバイオリンでしか、彼女の気持ちが分からなかった。しかし祖母の演奏するバイオリンはどこかもの淋しい響きがあり、謎は深まるばかりだった。ところが、祖母が100歳の誕生日を迎えた時に変化が起こった。アサヨさんは自分がカナダ移住前に日本で経験してきたことを話したのだ。この話

をもとに映画は製作された。作中、アサヨさん本人が話す英語は thank you や me などの簡単なものだけで、他はすべて日本語だった。異国に住みながら、日本語で約80年間通してきたのだ。

1898年広島県尾道でアサヨさんは生まれ、24歳の時に結婚。二人の娘に恵まれて幸せな結婚をしたはずが、一人息子は生まれてすぐに亡くなった。丈夫な跡継ぎを産めないという理由で嫁ぎ先から籍を抜かれた。不幸は重なり、元夫の消息が天災によってたたれ、最愛の娘たちとも生き別れてしまう。男の子を失うことがこれほどまでに負い目となり、厳しい風当たりにはさらされる文化が80年前の日本にはあった。嫁ぎ先を追い出されたことを恥じ、実家に戻ることできない彼女が行き着いた先がカナダだった。当時、独身女性1人では渡航できなかった為、写真結婚で結婚。しかしカナダ到着後、結婚を破棄し、その後、彼女は別の男性と結婚する。家族の誰にもこの事実をアサヨさんは話さなかった。日本では子どもを生むための道具としてしか扱われず、カナダで結婚したものの、戦争によって日本人であるために弾圧された。それにも関わらず、離れた母国や娘たちを思い続ける彼女の愛情が映画では強く感じられた。オーハマさんは、こうして自分のルーツーおばあちゃんの過去ーを知った。カナダで生まれ育った彼女には日本の血が流れていることを。この映画を見た後続の世代が、新しい歴史を作っていくことを期待する。

（文責 本学グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科1年 後藤由起子）



第22回定例セミナーのお知らせ

少女マンガにみるジェンダー —〈男装の少女〉はどのように描かれたか—

講師 押山美知子さん（専修大学人文科学研究所特別研究員）

日時 2009年10月23日（金）16：40～18：10

場所 愛知淑徳大学星が丘キャンパス4号館2階42E教室

どなたでも聴講できます。お気軽にご参加ください。

〈2009年度後期〉 21世紀の今、ASUのジェンダー論、女性学・男性学がさらに面白い!! (一般の人でも受講できます)

愛知淑徳大学、ジェンダー・女性学関連の授業

ジェンダーと教育

長久手

講師/國信潤子

【授業の概要】

ジェンダーの概念について正確に理解し、教育・生育過程で形成される固定的ジェンダー：性別役割分業とはどのようなものかを検討する。また、その社会的影響について考える。さらに「隠れたカリキュラム」として指摘される学校生活のなかの定型的性別役割分担についても事例的に考察する。

ジェンダーと社会

長久手・星が丘

講師/森井マサミ

【授業の概要】

「女」や「男」がどのように描かれてきたか。なぜそのように描かれたのか。本講義では文学作品や映画など、「表現」のなかにあらわれたジェンダー規範を、社会的・歴史的・心理的視点から解きほぐしながら、自由で多様な「性」のあり方を探っていく。

ジェンダーと社会

長久手・星が丘

講師/中島美幸

【授業の概要】

文学作品をはじめとする「表現」を取り上げ、「女」「男」がどのように描かれているか、またなぜそのように描かれたのかを、社会的・歴史的・心理学的視点から考える。また「表現」された「女」「男」によって、社会や個人がいかに固定的なイメージに縛られているかを認識し、自由な、現実の多様な女と男の生と性の「表現」を探る。

女性学・男性学

長久手・星が丘

講師/中島美幸

【授業の概要】

男女についての定説化した知識、それによって作り出された役割、人格の内部に及ぶ性別化の影響とその結果生まれる病理などについて、さまざまな事例や理論を紹介し検討する。

女性学・男性学

長久手・星が丘

講師/中村 彰

【授業の概要】

1999年6月に成立した「男女共同参画社会基本法」がめざす社会システムを検証し、仕事の間や家庭、地域で、私たち男女がフェアで対等に生きるとは何かを説明します。日本における女性運動、男性運動のあゆみにもふれ、先人たちの心根を学びます。セクシャル・ハラスメント、ドメスティック・バイオレンス、過労死、中高年の自殺など、そのときどきの社会問題を男女共同参画の視点で読み解きます。

比較文化

長久手・星が丘

講師/星山幸子

【授業の概要】

国際化が進み、世界の文化について触れる機会が多くなってきた。この授業では、文化を理解するための枠組みや概念を学ぶとともに、いくつかの事例をとおして「文化」について考える。さらに、異文化交流についても講義する。その際、民族、国家、南北問題、ジェンダー等といったさまざまな視点から文化について考える。とくに、イスラームの文化の事例も授業のなかで取り上げる。

ジェンダー論

長久手

講師/石田好江・小川明子・小久保潤子

【授業の概要】

ジェンダー(gender)という言葉は、おおよそ「社会的・文化的に形成された性」「社会的規範としての性役割」といった意味で用いられている。ジェンダーという概念を使用することは、単に「性別の捉え方」の問題(生物学的な性別への異議申し立て)にとどまらず、現代社会及びその知のもつ偏りや多様性を認識し、これまでとは違った新しい問題を発見することを可能にする。その意味では、ジェンダーは現代社会の現実をよりよく認識するための道具であるといえる。

本講義では、メディア・コミュニケーション、文化、社会システム等をジェンダーという道具を用いて捉えなおすことを目的としている。

ビジネスとジェンダーⅡ

長久手

講師/原山恵子

【授業の概要】

産業社会におけるビジネス行為はジェンダー：社会・文化的性によってその役割、評価、影響が異なる場合がある。特に、日本社会においては女性の地位は男女雇用均等法制定20年以上経過したというのはいまだ低い。経済のグローバル化の中で何が起きているのかを考察したい。男女雇用機会均等法の問題点、間接差別、不安定雇用の問題点、育児休業における男性の取得が極端に低い原因、職業と家庭の両立を阻むものなどに言及したい。産業界における人間関係についてジェンダーに敏感な視点から考察する。男女賃金格差、セクハラ事件などについても詳細に検討する。

ビジネスと社会

長久手

講師/國信潤子・原山恵子

【授業の概要】

ビジネス・労働環境における人間関係の諸側面を法制、社会階層、ジェンダー関係など産業社会学的視点および法制度から考察する2名の講師によるジョイント・ティーチの形式をとる講座である。近年女性の社会参画が社会のあらゆる側面に浸透しつつある。しかし雇用均等法などの法制は日本のビジネス界で適切に実施されているとは言い難い。そこで本講座では2名の講師によって経済活動、家族的責任遂行など多面的な考察をおこなう。

産業社会学概論(ジェンダー)

長久手

講師/國信潤子

【授業の概要】

本講座は産業社会学と開発社会学の2領域の接点についてジェンダーに敏感な視点、開発途上国問題などの側面から考える。まず日本国内のビジネス・労働界のジェンダー関係を概観し、国境を越えた移住労働者の増加の実態を検討する。次に異なる文化背景を持つ人々の職場での人間関係の問題を紹介し、ビジネス関係や開発協力関係を形成するときに必要な異文化理解について考える。近年の経済活動は環境に配慮した「持続可能な開発」「基本的生活ニーズ」の意味をジェンダーに敏感な視点とともに学習する。

愛知淑徳大学エクステンションセンター

これらの講座履修・申し込み先

〒464-8671 名古屋千種区桜が丘23
受付日時(月～金) 9:00～17:00TEL/052-783-1665(直通)、FAX/052-783-1621(直通)
ホームページアドレス <http://www.aasa.ac.jp>

編集後記

今年度前半のセミナーでは、三重大学の小川眞里子さんが、「ジェンダー化された自然」という演題で、博物学において定説となったジェンダー観を問い直すお話をされました。科学的言説の成立が恣意的だという講演は圧巻でした。またアメリカ視察報告会や大学院との共催講演会の開催とともに、学生自らがジェンダー関連学会に参加し、社会とのつながりにも触れる機会を得ました。28号ではこれらの模様を掲載いたしました。(高橋 博子)

ASU・IGWS2009年度

運営委員

平林美都子(所長兼)、石田好江、
國信潤子、米倉五郎、若松孝司、
西和久、佐藤実芳、森井マサミ

事務担当

高橋博子